山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第24号(2007. 9)

幼稚園の絵本コーナーにおける参加観察記録の分析

辻村明日香*・友定　啓子

An Analysis of Participant Observation Records : Scenes from Picture book section of a Kindergarten

TSUJIMURA Asuka* and TOMOSADA Keiko

(Received July 20, 2007)

キーワード：幼稚園、絵本、絵本コーナー、参加観察法

(1) はじめに　研究目的および参加観察法について

絵本は幼稚園教育の保育内容のひとつである「言葉」に関わる教材でもあり、絵本コーナーは園において幼児と絵本との出会いを保障する重要な環境である。そのためにそれぞれの幼稚園が工夫をしながら設置している。具体的には、個々の幼稚園の空間的条件に制約され、またその園の保育における絵本の位置づけによって、空間的にも様々な形態をとっている。保育室と同様に独立した一室を当てて、専用の図書室のようにしているところもあるが、独立したスペースを持たず、保育室の一角に絵本架を置いているだけのこともある。また廊下などの共用部分の一部を絵本コーナーとして利用することもある。保育室から独立している場合や共用部分を利用している場合は、ある程度の広さが確保されており、クラスを越えた異年齢のかかわりも成立する場所となる。

筆者らが観察の場としているＹ幼稚園では、園の中心的な場所である玄関ホールの一角を仕切って設置されている。それぞれの保育室にも小さな絵本ラックがあり、時期に合わせて20冊程度を子どもの関心と時期に合わせて置いているが、園内のほとんどの蔵書はこの絵本コーナーに置かれている。絵本コーナーがこのような条件におかれた場合の、そこでの子どもたちの姿の全体像を１年間の参加観察記録を分析することによって明らかにしたい。

１．保育における参加観察法について

観察は、質的研究法のデータ収集の代表的な方法であり、「そこに誰がいて、その場や活動に参加しているか、何が起こっているのかなどをを明らかにしていくことができる」。[1)]保育研究における参加観察法は観察者が保育の場に入り、保育に補助的に参加しながら自然観察を行い、終了後記録を作成し、それを基本資料とすることで保育上の問題を考えるものである。文化人類学におけるフィールド調査に近い。テーマをあらかじめ細かく絞ることができないという弱点があるが、場所や時間・対象を決め、大まかな研究的関心の

＊山口大学大学院教育学研究科

もとにその場に参加し、記録等が蓄積されることで、具体的に分析可能なテーマが構成されてくる。保育研究の場合、対象園の許可と協力を得て、定期的に保育の場に通い保育に参加しながら自然観察を行うことになるが、対象が幼児である場合、完全な観察者になることは不可能である。観察者が観察に専念しようとしても、幼児からの観察者への働きかけも多く、それに無反応で存在することは不自然であるばかりでなく、逆に幼児に警戒感を与え、自然な観察ができなくなる。また幼児から遊んでほしいと誘われたり、必要な援助も行わねばならず、保育補助者としての役割も要請される。観察者から積極的に動くことは控えるが、自然に応答することが、その場での幼児との信頼関係を形成することにつながり、幼児の行動理解や保育理解の機会になり、記述がより厚みを増してくる基盤となる。幼児との応答によって観察者の関心が拡張され、記述が外見上の行動の記述に終わることなく、幼児の行動の奥の心理やその背景を広く深く把握することを可能にする。研究者が保育を理解しながら、実践的な視野を持って研究を進めていくことができる研究法といえる。

辻村は2005年5月から2007年7月まで、国立大学附属Y幼稚園にて、園内に設置された絵本コーナーにおいて、定期的に参加観察を行った[2)]。観察者は原則としてこの場所から離れて他の場所へ行くことはせず、コーナーでの子どもの要求には応じ、必要に応じてかかわりを持つことにした。記録は保育終了後に作成した。観察総日数は39日であった。今回分析の対象とする記録は、そのうちの2006年4月から2007年3月までの1年間に作成されたものとした。観察日数は24日、観察記録数は148事例になった。本報では、観察記録をもとにして、2006年度に子ども達が絵本コーナーをどのように利用していたのか、全体像を明らかにすることを目的とした。対象期間を1年間に限定することによって、その年度の特徴をつかむことを可能にする。年ごとの特徴をつかむことは、一般的な特徴を知るとともに、保育にとって実践的な意味があると考える。

2. Y幼稚園の絵本コーナーと参加観察者の役割

1995年、Y幼稚園では、保育室のような動きの激しい遊び空間とは別に、子どもが落ち着いて絵本を読めるような静かな空間が必要だという認識のもとに、絵本コーナーの設置が検討された。しかし、現実には独立した図書室として当てられる部屋はなく、考慮の末、玄関ホールの一角を活用することになり、その後様々な工夫改良を加え、今日に至っている。広さは約6畳程度で、周囲を高さ70センチの書架でぐるりと囲み、コーナーの床には明るい色のカーペットが敷かれている。中央に低いテーブルがあり、

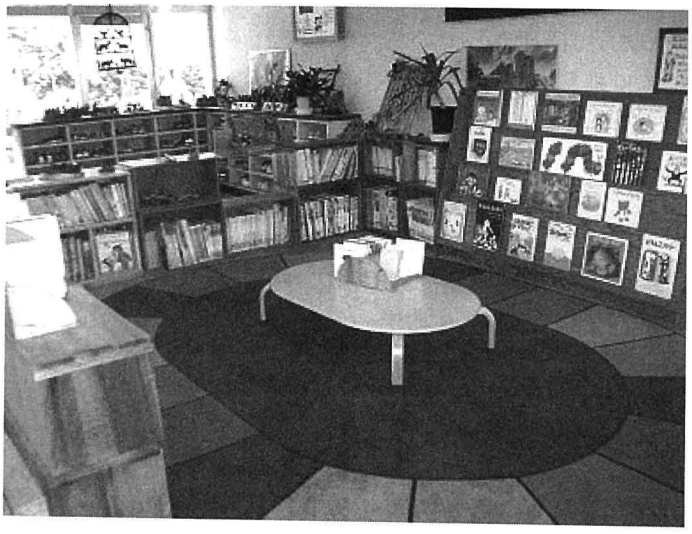


写真1　絵本コーナーの内部

床に座って絵本を読めるようになっている。誰でもいつでも自由に入ってよい空間であり、管理担当の保育者はいるが、常駐の保育者はいない。しかし、大人の助けを借りずに絵本の文字が読める幼児はさほど多くなく、子どもの要求に応じて近くの管理棟にいる教職員や保護者が状況に応じて読んでやっている姿をよく見る。その意味でも、玄関の一角というこの場所は好条件でもある。

その絵本コーナーに観察者が入ると、週１度ではあっても、その日は読んでくれる大人がそこにいるということになる。子どもにとっても意味がある。観察者は原則としてこの場から離れず、子どもの読んでほしいという要求には積極的に応じ、さらに必要に応じて保育補助者としての援助を行う。幼児が絵本を読んでもらう機会は、保育の中でお帰りなどの集まりの時に多くとるようにして努めておられるが、担任の保育者が保育中に個々の子どもに絵本を読んでやる機会はそう多くはとれない。また保護者の絵本の読みきかせの活動もこのコーナーを利用して行われている。このような状況を背後に参加観察を行った。

（２）観察記録から見えてきたこと

１．絵本コーナーでの日常的な姿

記録には、多くの子どもが観察者に「読んで」と言って絵本を差し出す姿が記述されている。観察者にじっくり絵本を読んでもらいながら、その本についての会話を交わすことも多い。数人で読み合うことになる場合もよくある。誰でも自由に入れるので、異年齢の交流も自然に発生する。次の二つの記録はその一例である。記録中の「私」は観察者であり、『　』内は書名である。

記録１　(2006. 9. 26)　　観察者と二人で交互に読みあう

Ａ子（5歳児）が、私に「読んで」と『どうぞのいす』を差し出し、Ｂ子（5歳児）も『ゆうたのおかあさん』をもってくる。「Ａちゃんが先だったから、こっち先読んで、そのあと、こっち読むのでいい？」「うん」と、Ｂ子。「じゃあ、この絵本も一緒にみよっか」と誘う。Ｂ子はニコっとしてぴょんと隣にすわる。

Ｂ子は「これさっきも読んだもんね」と言う。Ｃ子と二人で各々読んでいたようである。「ゆうたのおかあさん」とタイトルを読み、ページをひらく。右ページにおかあさんがやること、左ページに犬のゆうたがやることが短い文章で比較して書いてある。私が右ページを読み、左ページを読もうとすると、Ｂ子が「おれ○○」と、その部分を読む。ふたりで交互に読んでいった。「二人で読めたねえ」と私が言うと「うん」と答える。Ｂ子はさらに「読んで」と、『ちいちゃんとおみこし』『ちいちゃんとまめまき』『ちいちゃんとゆきだるま』をいっきにもってくる。『ちいちゃんとまめまき』で「あーころちゃん、たべてる　こりこりぽりぽり」と、逃げていた鬼のころちゃんが隠れて豆を食べている様子のところで、くすっとＢ子が笑う。Ｂ子は自分で読めそうなものは自分の力で読んでみたいようで、『ちいちゃんとゆきだるま』を自分で読もうとする。ほとんど間違えずに読めるのだが「読めん」と、絵本を私にわたす。「上手に読めちょったよ」と言うが「むずかしい」と言う。

Ｂ子はちいちゃんシリーズがおわると、満足して絵本コーナーを出ていく。そのあとＡ子は「読んで」と、『ゆうたのおとうさん』をもってくる。「いいよ」と、タイトルを読み、本をひらき読み始める。すると右ページを読んだところで、Ａ子が左ページを読む。Ｂ子

と同じようにして読みたかったのだとわかる。B子と私が「二人で読めたねえ」と、話しているところを見て、楽しそうだな、いいなあと、思っていたのだろう。

記録２　(2006.10.12)　異年齢と触れ合う、友達と一緒に読む

A夫（４歳児）が静かにテーブルで絵本を読んでいる。もう一人E子（３歳児）も絵本を広げている。「なんかみつからないなあ」とE子。『よーいどん！』で運動会にきている色々な人が２ページにわたってかかれているページを開いて、何か探している様子。「なになに？なにさがしてるの？おもしろそうね」と私はE子の側に座る。A夫も顔をあげ、『よーいどん！』のページをみる。「あっ、この人、髪の毛がくるくるじゃね。おもしろいねえ」と言うと、「あっゴリラがおる！」と、A夫。E子はちらっと、A夫のほうをみる。どうもA夫が絵本に指をさしてくるのがいやな様子。「にわとりがおる」とE子。「ここにもおる」とA夫。A夫は次のページが見たくなってページをめくろうとする。「ちょっと！ページをかえないでくれ！」と、E子は強くA夫に言う。A夫は「ありゃ、おこられちゃった」というように私に笑う。E子はその絵本を最後までめくると、さっさと絵本コーナーを出ていってしまう。(中略)

続いて『からすのパンやさん』を「読んで。」と、A夫がとりだす。F子（４歳児）も一緒にみる。カラスがとまった山が描かれている。「カラスの家なんかねえ」とA夫。「そうやろうねえ」「数えられるよ」と、A夫。「１、２、３・・・」F子も途中から一緒に数えようとするので、A夫は数えられなくなる。「もう…、もう一回」と言って再び数えるが、またF子につられてしまう。「Aくんちがうよ」と、あっているのに指摘され、また数え直す。「もう、数えんでよ」と強く言い、結局５０羽近く数えた。「ほら」と、A夫はおいしそうな焼きたてのパンが描かれたページを出す。「わあ、おいしいそう」と、言うと、「全部たべちゃる」と、A夫が全部食べたまねをする。F子も負けじと食べる。カラスを数える場面でも感じたが、それからさらに競争心が強くなっているのがわかる。A夫が、色んな種類のパンが見開きいっぱいに描かれているページを開く。「わあ、すごーい。おいしそう。これ、全部パン？」と、私が聞くと、「そうよ。全部パンよ」と、A夫。「先生どれがいい？」「うーん、キリンかなあ。あっ、ピアノとかもあるんやねえ」「どれが一番むずかしいかねえ」とA夫。「そうやねえ」「あっ、だるま。これ難しいよ」「ああ、ほんとねこれは難しそうやねえ」「あっワニとかも」と、F子。「おっ、これもギザギザで難しいやろうねえ」と難しいパン探し競争のようになり、結局ほとんどのパンを指さす。

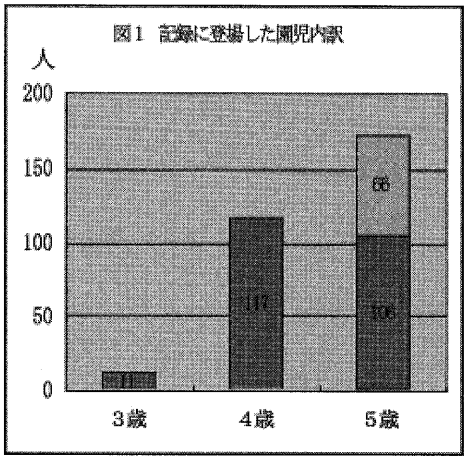
付記：　A夫は大体B夫と一緒に遊んでいることが多い。虫かごを手に絵本コーナーに走って入ってくることが多い。(きちんと上靴は脱いではいってくる。) そのイメージがあるので静かにおとなしく一人で読んでいる姿をみたのは初めてだと思う。私や他の子どもと読んでいるときは多弁で、一緒に読んでいる私も含め、周りの子達に「ねえ、～よねえ。」など、話しかけながら楽しんでいる。また、人数が多いとテーブルに体を乗せ、絵本にできるだけ近づいてみている。一人で読む姿は絵本コーナーに私がいると見られない姿なので貴重だった。絨毯の上に正座をして両手で絵本を持って読んでいる。きれいな姿勢なので、少し驚いた。私が近づくととたんにA夫はいつもの読みにもどる。A夫はどの子が選んだ本でも一番楽しんで夢中になってしまうので、自分のペースでページをめくろうと手が伸びてしまうのではないかと思う。『カラスのパンやさん』『よーい、どん！』の両方とも２ページにわたり、細かな絵が描

いてあるところがある。「こんなのがある」「こんなのみつけた」と 、発見したことを喜んだり、他の子よりも先に何かみつけてやろうという気持ちにさせたり、ひとつひとつにユニークさを交えて描かれているので一つひとつを楽しむことができる。じーっと楽しんだり、友だちとわいわい言いながら楽しんだりと色々な楽しみ方ができる。『くだもの』などいろんなものが細かく丁寧に一面に描かれているものは大人も子どもも心をひかれる。

絵本は一人で静かに読むこともできるが、絵本コーナーでは多くの場合、友達と一緒に読むかたちになる。観察者に読んでもらったり友達の読む姿を見たりすることで、絵本の楽しさを知り、人と一緒に読むおもしろさも体験できる。大人が間に入ることによって、絵本を媒介とした友だちとのかかわりを自然に体験する場にもなっている。時には一緒に読めなかったり順番をめぐってトラブルも生じたりするが、その体験自体にも価値がある。絵本は幼児も絵を手がかりに内容を共有しやすく、同じものをおもしろいと思うことで、自分と友だちへの肯定感と親密感を増すことにつながる。

2. 絵本コーナーに来る子どもたち

Y幼稚園には、3歳児から5歳児まで約150名（3歳30名、4・5歳児各60名）がいる。記録に登場する子どもの延べ人数は300名，単純に計算して1回当たり、12.5名である。記録に登場し、観察者の目に触れ、かかわった子どもの数であるから、少なくともこれだけは訪れた最小値ということになる。その年齢別の内訳を図1に示したが、3歳児4%（11名）、4歳児36%（117名）、5歳児57%（173名）で、5歳児が最も多く過半数を占める。2006年度は5歳児がよく利用したということがわかる。ただ、この年の5歳児に関して詳しく記録を見ると、特定の子どもが何度もここで過ごすということが大きく影響している。延べ人数は173名であるが、そのうち66回登場する子どもが1人いた。これを差し引くと4・5歳児がほぼ同数ということになる。この年はたまたま5歳児であるが、「常連」が何人かいることはよく見られる現象である。



3歳児が非常に少ない理由には、3歳児の行動範囲がここまで及ばないということと、この空間そのものへのなじみの薄さがあげられる。絵本コーナーは玄関にあるから全年齢の子どもになじみがあるように思われるが、実際の園児の昇降口は年齢によって違っている。3歳児は保護者に付き添われて直接自分の保育室に登園することになっていて、日常的に玄関を通ることがないので、玄関にはなじみが薄い。逆に4歳児の昇降は、この玄関で行われる。日々通る場所であるだけになじみもあり、また成長して行動範囲も広くなっている。5歳児の昇降口は玄関を使わないが、4歳児の時の経験と行動範囲の広さがある。

3. 記録に登場する絵本

記録中に登場する絵本は113冊、延べ171冊である。この数字をどう読むかは微妙であるが、非常に多岐にわたっていると考えてよいと思われる。複数回出てくるものがさほど多くなく、1,2位をのぞくと分散していて、特定のものに集中しているとはいえない。頻度順に代表的なものをあげてみると表1のようになる。図鑑が最も多く、次にねずみくんシリーズである。上位3つについての記録をあげる。

表1　記録に登場する絵本

順位	書　　名	回数
1	図鑑（動物・恐竜・魚など） 学研	17
2	ねずみくんシリーズ なかえよしを作・上野紀子絵　ポプラ社	11
3	おかあさんがおかあさんになった日 長野ヒデ子さく　童心社	5
3	かいじゅうたちのいるところ モーリス・センダックさく　じんぐうてるおやく　富山房	5
5	おとうさんがおとうさんになった日 長野ヒデ子さく　童心社	4
5	へんてこライオンシリーズ 長新太さく　小学館	4

①図鑑（動物・恐竜・魚など）

絵本コーナーで、幼児にもっとも読まれているものが図鑑であるというのは、予想外であった。絵本コーナーにある絵本で圧倒的多数を占めるものが物語絵本であり、これだけ多くの物語絵本があるのに、なぜ数少ない図鑑が頻繁に取り出されているのだろうか。その理由は、幼児にとって本は「文字を読むもの」ではなく、「絵を見るもの」であるということにあると思われる。文字を持たない幼児期の読書の基本は「耳からの読書」であり、文字は大人に読んでもらい自分はそれを耳で聞き、目では絵を読むという構造になっている。その段階にある幼児達がみずから絵本を手に取るときの手がかりは、やはり「絵」ということになる。絵は文字とは比較にならないほどの情報量があり、読者は自分の理解力に応じて個々に楽しむことができる。図鑑はその典型ともいえる。物語絵本ではストーリーを追うために、前後を連続させて理解するという高度な認識力を必要とするが、図鑑などのモノの本は各ページが相対的に独立していて、前後を考慮する必要がない。「物語を読む」というより、「単独で絵を読む」、「確認する」というかかわり方である。

幼児にとって、絵本は自分自身や自分の生活を強化してくれるものとして存在するようである。図鑑の中でも特に、動物・恐竜・魚などの図鑑が男児に好まれている。典型的な図鑑好きの子どもの記録をあげる。

記録3　好きでたまらない動物図鑑

B夫（4歳児）はずっと動物人形ごっこをしている。聞き取れる言葉もあるが、ほとんどが言葉ではない。ライオンをアレックス、シマウマをマティーと呼び、グロリアと呼ばれる動物がいることは、側で見ていてわかった。『どうぶつのせかい』という図鑑を新しく出し、ダチョウの卵が載っているページをひらき、「大きい」と、私に言う。「ほんとね、大きい」。シマウマとライオンが大きく口を開けた真っ正面の写真が載っているページを開く。草食動物と肉食動物の歯の違いを見ようというページである。「みてん」と、B夫は図鑑を私の方へよせる。「わあ、ライオンは牙がすごいねえ」「うん」すぐあとに「よくみてごらん」と、B夫はシマウマと、ライオンのフィギュア人形を渡した。シマウマと、

ライオンの首ねっこをしっかり持って顔がそろって図鑑と同じにみえるように渡してくれる。動物人形の口を確かめる。「ほんとねー。みんなちがうねえ」「だから、動物は全部違うんよ」と、B夫。

付記：B夫が、動物人形につけた名前はまるでライオンキングか何かに出てくるような名前だなと感じた。B夫が「みてん」と、一生懸命言っていたのは、「図鑑と同じのができたよ」という意味だったのだとわかる。「だから動物は全部違うんよ」というのは、B夫が動物を好きな理由の一つではないかなと思った。みんなちがうから面白いんだと、B夫は考えているのかもしれない。(2003.5.29)

記録4　恐竜の気分になる

図鑑『恐竜』をC夫とD夫が一緒にみている。「…やし」「足大きいね」「食べられたらどうする？」「これも肉食やろ」「こわいね」「わー。でかい足だな」と、二人で興奮ぎみに図鑑をのぞいている。「ほんとねえ。こわそうねえ」と私が言うと、「ガー。～ザウルスだ！」「ギャー」「キャーゥ」と、二人で恐竜の格好を真似して首を大きくまわしながら叫ぶ。頭をぶつけながら戦っている恐竜をみて「ごんごんザウルスじゃ」と、C夫。「ごんごんザウルスって」と、D夫は笑う。

樽野博幸
『こどもずかん⑥きょうりゅう』

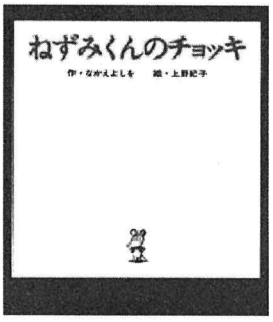
付記：図鑑は本物の写真や本物に近い絵がのっており、そのものの特徴がとらえやすく、自分の知らない世界、新しい発見、本物の臨場感を他の絵本よりも味わうことができるという魅力がある。子どもたちはじっと図鑑にみいったり、友達と感嘆の声をあげて爪のするどさにおどろいたり、毛のふわふわ感にかわいらしさを感じたりしている。自然界にある自分の手や目の届かない未知の世界は、冒険をしていくようなどきどき感と想像のふくらみを子どもたちに与えるのではないかと考える。それがエネルギーとなって外にあふれでたひとつの形が、C夫とD夫の恐竜になりきって叫ぶことだったといえる。図鑑で恐竜の足の大きさに驚いたり「食べられたらどうする？」と想像したり、完全に恐竜の世界に入ってしまっている。私が話しかけたことで現実に戻され、その第一声が「ガー、○○ザウルスだ！」だったのだ。(2007.1.18)

②ねずみくんシリーズ

ねずみくんシリーズは、なかえよしを作・上野紀子絵の小さいねずみが主人公の物語絵本である。代表作の「ねずみくんのチョッキ」では、ねずみくんはお母さんに作ってもらった赤いすてきなチョッキを着ている。それを見たからだの大きい動物に次々着せてほしいと頼まれ、貸してやるたびにどんどん伸びていってしまうお話である。最後に伸びきってしまったチョッキをみて、ねずみくんはしょげてしまうが、最後にゾウの鼻にぶら下げてブランコにするというオチがついている。ページのつながりに説得力があり、絵だけでもストーリーがわかるようになっている。文章もリズミカルな繰り返しで、一度読んだらすぐに覚えることができる。動物の大きさが幾何学的に大きくなっていくのが視覚的にもよくわかり、色使いもポイントを押えていて、幼児にとてもわかりやすい作品である。シリーズになっていて、キャラクター化していることも魅力のひとつである。

記録５（2006.6.9）　ねえねえ、これおもしろいよ。みていいよ。

Ｇ子（3歳）は『ねずみくんのブランコ』を読もうとしている。「ねずみくんシリーズだねえ」と、そばにいたＨ子（4歳）に言うと、「Ｈちゃんも大好き」と、ねずみくんシリーズのところにいき、『ねずみくんのチョッキ』をもってくる。「読んで」とＨ子。「おかあさんにあんでもらったぼくのちょっき」と読むと、「おかあさん、誰なんかねえ」とＨ子が言う。「誰なんかなあ」と私。「いいチョッキだねえ。ちょっときせてよ。うん」「すこしきついがにあうかな？」と、いろんな動物がねずみくんのチョッキを着ていく。「すこしきついがにあうかな？」と、言うと、「にあわん、にあわん」とＨ子。Ｇ子は、自分で声に出して『ねずみくんのブランコ』を読んでいる。Ｇ子の方が先に読み終える。「ねえねえ、これおもしろいよ。みていいよ」と、Ｈ子の前に絵本を置く。「わあ、ありがとう。おもしろいの？」と私。「うん。だってね、だからおとうさんにおこられるのにってなるんよ」と、最後のオチのページをひらいてみせてくれる。Ｈ子も見る。



なかえよしを・上野紀子
『ねずみくんのチョッキ』

付記：友達が絵本を楽しんでいると、他の子どもたちも影響されて同じシリーズの絵本を手に取り読むことがよくある。Ｈ子は『ねずみくんのチョッキ』を読むとき、以前も「おかあさん、誰なんかねえ」と聞いた。また、「にあうかな？」の問いに対し、「にあわん、にあわん」と答える。この絵本で、Ｈ子は私とこのやり取りをすることを楽しんでいるようである。Ｇ子はＨ子が楽しそうに私とやり取りをしながら読んでいるのを聞き、自分で声にだして読みながら、気にしているようだった。読み終えたらすぐに自分の読んだ絵本を紹介してくれる。「おもしろいの？」と聞くと、Ｇ子はお話のオチのおもしろさを伝えようとしてくれる。

③「おかあさんがおかあさんになった日」と「おとうさんがおとうさんになった日」

「おかあさんおかあさんになった日」は絵本ラックにいつも置かれていて、多くの子どもが興味を持って手に取る絵本のひとつである。子どもの誕生という自分の根源に関わる生活体験を、やさしいことばで語ってくれる絵本である。病院内の様子が幼児の思考にあわせて詳細に描き込まれていて、絵を読むおもしろさがふんだんにある。

記録６　（2006.5.29）　ここもここも読んで

Ｂ夫（４歳児）が、「ねえねえ、『おかあさんがおかあさんになった日』と『おとうさんがおとうさんになった日』があるよ」とラックからもってくる。両方をテーブルの上にならべる。「これ、読んで」「いいよ。じゃあ、どっちから読もっか？」「うーんと、こっち」。『おかあさんがおかあさんになった日』から読む。「ねえ、ここも読んで」小さい字のところも読んでと言う。すでに読んだところも関係なく指を指して「ここも、ここも」と指す。Ｂ夫の指のさすところを読む。病院の中を散歩するページ。おかあさんが歩いたところが、点々でむすんである。「トコトコって」と私が指さすと、「足あとじゃ」とＢ夫。

長野ヒデ子『おかあさんがおかあさんになった日』

次に『おとうさんがおとうさんになった日』を読む。「これん、あかちゃんが二人もおる」と、お兄ちゃんとお姉ちゃんの二人をさして言う。「おなか大きい」と、お母さんのおなかを触る。「ほんとねえ。大きいねえ」お父さんが子ども二人を抱いている絵を見て、「お父さんも大きい」「お父さんも？うん。お父さん、大きいねえ」お父さんの上半身が大きく描かれ、子ども二人を余裕で膝の上にのせている絵なので大きく見えたのだろう。赤ちゃんが生まれるところをみんなで見守っているページ。「だいじょうぶ、がんばれって」と私。「おねえちゃんも、おにいちゃんも心配しよって」とB夫。最後のページにお父さんがお母さんのかわりに掃除機をかけている絵がある。掃除機のコードにお姉ちゃんがつまづいて転び泣いている。お母さんは赤ちゃんを抱いてほほえんでいる絵である。「ここも読んで」「ワーンって」「ここは？」「ブーンブーン」「何で、赤ちゃん、目あけちょるん？」「うーん」「びっくりしたけえ？」「ああ！そうかもしれんねえ。びっくりしたんかもね」

付記：絵本コーナーのラックが一つ増え、たくさんの絵本に囲まれた絵本コーナーになった。B夫は、いつも動物の載った絵本を選び出すのに、今日は物語絵本を選んだ。お姉ちゃんのD子がよく「読んで」と、言ってくる絵本なので、B夫もなじみがあった絵本だったのかもしれない。ラックにこの絵本があるときは、子どもたちはこの絵本を手にすることが多い。自分にとって一番身近で大好きなお母さんお父さんが、赤ちゃんが生まれるときの話を自分たちにしてくれるかのような文である。自分も赤ちゃんだった。弟、妹の存在。赤ちゃんってどうやってうまれるの？子どもたちが興味関心を強く持つようなことがこの絵本にはかいてある。子どもたちの想いにこの絵本が答えてくれるのだろう。

表１にあげたものの他に、馬場のぼる「１１ぴきのねこシリーズ」（こぐま社）、田島征彦「じごくのそうべえ」（童心社）、せなけいこ「おばけのてんぷら」（ポプラ社）、トニー・ウンゲラー「すてきな三にんぐみ」（偕成社）など、どちらかといえばコミカルなもの、かつわかりやすいものが多く登場する。またこれらは、友だちと一緒に読める本でもある。

また、多くの子どもが手にする本は、前に見たもの、知っているものである。記録でも、同じ本を同じ子どもが何度も手にとっていたり、読んでもらったりしている。新しいものは、誰か親しい者が間に入らないと自分からは手が出ないようである。

子どもにとって、本を選ぶことはたいへんなエネルギーを要する。全国学校図書館協議会と毎日新聞社が主催する小・中・高校生を対象にした「学校読書調査」[3]でもこの点は同じ傾向が見られ、毎年上位にくる本は、テレビドラマ化されたものや映画化されたものが多い。また、特定の本にさほど集中しないことも同様である。

幼児の選書は、レイアウトとディスプレーに強く影響される。写真１の右側のような絵本の表紙が見える形での平面展示が決定的に重要で、背文字だけが見える垂直展示では、文字が読めないので強い目的意識がないと選び出せない。かといって平面展示が多ければよいというわけでもなく、書架の収納量との兼ね合いで、バランスが必要になってくる。また絵本は、ひとりひとりが自分の関心や理解力に応じて選ぶために多様化していくのが必然である。その点を考えると絵本コーナーには、多種多様の書物をおいておく必要がある。文字を読む、ストーリーを楽しむことにこだわらずに、写真集や自動車のカタログなど、絵としての情報量の多いものには子どもが関心を持つと考えられる。ただ、漫画のコ

マ割りという時系列の空間的表現の理解は幼児には難しい。

4．居ごこちのいい場所としての絵本コーナー

絵本コーナーには多くの場合、子どもは絵本を見るためにやってくる。しかし、このコーナーに来ていながら、全く絵本に触れない子ども達も少なからずいることが、記録からわかる。広さにして６畳程度、70cm の高さの書架に周囲をぐるりと囲われ、フロアには明るいカーペットが敷かれ、低いテーブルがあり、花も飾られ、心和むインテリアグッズもある床座式のこの空間は、保育室に比べしっとりと落ち着いた空間である。絵本を読むには至らないが、観察者に話しかけおしゃべりをする、自分の作品を見せに来る、絵を描く、トランプをする、ごっこ遊びをするなどと遊びの場として使うこともある。そこにいる他の子どもと折り合いが付けばそのように使うことも認められている。また、集いなどの全体活動に入りそびれたり、参加したくない時にやってくる子どももいる。適度に囲われて庇護的なイメージがあることと、絵本という虚構の世界に入ることで一時的に現実の要請から逃れられることが関連しているようだ。さらに、けんかやトラブルで気分が落ち込んで一人になりたい時や泣きたい時に訪れる癒しの空間でもある。対象とした 148 事例のうち 45 例、ほぼ 3 割がこれら絵本に触れない使い方をしていた。

①自分の作品を見せに来る

記録７（2006. 6. 5）「見てー、作ったの」

Ｐ子（４歳児）がピンクの長い紙テープに箱をつけて、肩にかけてやってくる。箱は手に持っている。紙テープが長すぎるため、箱は手に持たないとひきずってしまう。「みてー、作ったの。」とＰ子。「まあ、いいねえ」Ｐ子は箱から食べるまねをする。「まあ、おべんとう？いいねえ」と言うと“うん”とうなずく。絵本コーナーに入ってきて、箱の中身を見せてくれようとする。中身もちゃんといれて、しめたらしい。しっかりしまっていたので少し時間がかかる。中には色水で紫色に染められた紙がビニール袋に入れられてはいっていた。「あ、こんなのがはいってたのね。すてきねえ」と言うと、ニコリとする。

付記：しっかりと閉めていた箱を開けて、中身をわざわざ見せてくれる。それまで一生懸命にセロテープで箱を止めて作った姿が想像できて悪い気がする。しかし、それを作るまでに使ったエネルギーなど関係なしに破ってでも見せてくれる。この人に見せたい、何かしたいと思ったとき、それまで自分の苦労や、努力があったとしても、子どもたちは大人よりもその気持ちを優先して行動できるのかもしれない。

②ごっこ遊びの舞台にする

記録９　(2, 006. 11. 10)「家族ごっこする？」

絵本コーナーで、Ｑ子が学校ごっこをしているのを見て、「この学校は晩ご飯とかもぬきなの？」とＭ子。すると「Ｍ子ちゃんも、家族ごっこする？」とＱ子。「うん、する」とＭ子。「私バブちゃん」とＱ子。Ｍ子はお姉ちゃんになりたいと言い、私はお母さんをすることになる。「バブちゃんがおなかすいたって言いよるんよ。ミルクあげんと」「ああ、よしよし」と、おっぱいをあげるまねをする。「しゃー。バブちゃんがおしっこもらしたんよ」私がおしめを替えるまねをしながらＱ子をくすぐると笑う。「はい、できた！」と、ぽんとＱ子をたたくと「ぶりぶりー。今度はバブちゃんうんこもらしたんよ」とＱ子。「まあ、

ほんと！こりゃいけん。あーくさい！くちゃい！くちゃい！」と、おしめをとりかえるまねをする。すると、Q子もM子も大笑いする。M子は学校に通うお姉ちゃんであり、Q子は幼稚園にかようバブちゃんという設定になる。夜がきて、朝がきて、と遊びの中に一日という時間軸がはいり、M子も「学校の宿題をやらないと」と、白いノートに日記や宿題の絵を描き出す。バブちゃんになったQ子が朝と幼稚園から帰ったときにおしめを毎回替えられる。そのやりとりが一番おもしろい様子である。（中略）

Q子とM子たちと家族ごっこをしていると、年中の子が絵本を読みに来る。ファーブル昆虫日記が置いてあるところに行き、私に「これ、読んでるんじゃ」と、『ファーブル昆虫日記②』をとって表紙を向けて見せてくれる。それを見たQ子は「なんで学校、くるん！！」と怒る。「Qちゃん、K組さんはここで家族ごっこしよるなんて知らんじゃん。ここは絵本コーナーじゃから、絵本読みたいっていうお友達がたくさんきてのはしかたないよ」Q子は「でも学校じゃもん」と言って、他の子どもが絵本コーナーに入ってくることにいい気がしないようである。

③　集会に行きたくない

記録10　　（2003. 12. 16）「いきたくない」

誕生日会に行く時間が来る。「Mちゃん、もう、誕生日会に行く時間よ」と言うと、「いきたくない」とM子。「先生との約束だったじゃない」と言うが、「いかない」とM子。T夫に「H組さん、今から誕生日会なんだって。いいねえ。何があるんかねえ。先生もいってみようかな」と言うと、「ぼくもいってみようかな」と言う。他に絵本コーナーに残っている子はいなかったので、M子一人になる。「Mちゃん、誰もいなくなっちゃうよ。ひとりじゃトランプはできないよ」と私が言うと、「しかたないな」と言って絵本コーナーを出る。（中略）M子は渡り廊下を遊戯室にむかって歩いていくが、途中で立ち止まっている。あれ？と思い、みていると、B子が向こうからやってきて、しょうがないなあという感じで「ほら、Mちゃん、一緒にいこ」と、M子の手をひいて遊戯室へいく。

④気持ちが沈んだ時

記録9　（2006. 10. 12）　けんかした

M子（5歳児）と一緒に『がらくたランド』を見ていると、N子がうつむき顔ではいってくる。絵本コーナーに入ってすぐに本棚の方へ向き、膝を抱え、私たちに背を向けた状態になる。N子はじっとうつむき加減でいる。「どうしたの？」N子は答えない。「どうしたんかなあ」と、私に気づいて顔を向けたのでM子にも言う。わたしがN子に近づくと、「あら、あの子泣いてるの？」と、M子。「うーん」と、首をかしげてM子に答える。「どうしたの？何かあったの？」と、声をかけると、N子は頷く。「そうなの。何があったの？」「Oちゃんとけんかした」「そうなの」「あやまったけど、許してくれんかった」「そうなの。Oちゃんダメって？許してくれんかったのかあ。それは悲しかったねえ」「一回あやまったけど、許してくれんで、やけえ、もう一回ちゃんとあやまったけど、許してくれんかった」「そっかあ、二回も謝ったのにかあ。がんばってあやまったのにねえ。今でもだめかなあ。今なら許してもらえるかもよ。もう一回いってみる？」と言うが、N子はうつむいたまま黙っている。そのあと、よく事情を聞けないままに、別の子ども達が来て、N子を連れて行ってしまう。

付記：　N子はふだん絵本コーナーにこない。喧嘩をして、一人でいることよりも、誰かを味方につけて「もうしらない！」と怒っていってしまう年中組の時のイメージが強い。何をしてO子を怒らせてしまったのかわからないが、N子は本当に許して欲しかったのだろう。自分の非を認めて、目の前の相手に言葉にして謝るのは、精神的に強い力が必要になってくる。勇気が必要である。N子は1回目では自分がきちんとした謝り方ではなかったのでもう一回勇気をだして謝ったのである。これならきっと許してくれるだろう。そんな思いで謝ったのに許してもらえなかったN子のショックは大きい。そんな思いをかかえて絵本コーナーにきたのである。それなのに、ほんの少ししかN子の話を聞いてあげることができなかった。他の子の対応に気をとられて「今、N子ちゃんとお話してるからね。ちょっと待ってね。」くらいの一言も言えなかったのがくやしい。ふだん絵本コーナーに来ないN子が自分のまわりにいる友達もいなく、一人になってどうしようもなくなったときに絵本コーナーという場所を選んだのである。そのことをもっと重くうけとめるべきであった。

5. 絵本コーナーによく来る子ども

この年の特徴のひとつとして、M子（5歳児）がこの絵本コーナーで多くの時間を過ごしたことがあげられる。必然的に観察者とのかかわりも多くなった。M子は本を読む力があり、黙読もできる。絵本だけでなく側にある書架からイラストの多い大人用の書物を取り出して読むこともよくあった。友だちと応答しながら遊ぶことがやや苦手で、絵本コーナーにやってきて書物で過ごすことが多かったが、絵本を使いながら観察者と遊ぶことも楽しむようになり、卒園の頃には、クラスの友達とのごっこ遊びを楽しむようになった。

<u>M子と絵本コーナー</u>

記録１１　(2006. 10. 26) 通販ごっこ

M子が、「ねえ、おなかすかない？この本にはレトルトやナース服もあるのよ。これなんでもあるカタログなんだから」と、『おかあさんがおかあさんになった日』を持ってくる。「あなた、何がほしい？」と、M子が聞いてくるので、「そうねえ、松葉杖とかほしいかな」と、病院内の絵からアイテムを探す。「わかった」とM子は言い、電話をかけるふりをする。「もしもし。あの～松葉杖を一つお願いします」とM子。すぐに「ピンポーン。あっ、きた」とM子が言い、玄関に荷物をとりにいくしぐさをする。「これは全部ただなのよ」と、M子。「そうなの？まあ、すてきねえ。じゃあ、どんどんたのんじゃおうかな」「ベッドとか病人用机とかありますけど」とM子。「そうねえ、病人用机あったら、便利だからこれいいねえ。じゃあ、これください」「はい。もしもし。はい。今ならベッドとセットでついてきます」「あら、じゃあそうして。それください。ベッドとセットなんていいねえ」と私が言うと、「もしもし、じゃあ、それ下さいセットの」「ピンポーン、はい」とM子。「まあ、もう。早くて便利ねえ」と私。大きな荷物なのでM子は大きく手を広げて家の中に置くふりをする。

「おなかすかない？」「うん。何かたべたいねえ」と私が言うと、「たくさんのってるのはこれよ」と、科学絵本の『しまりす』をもってくる。「あ、木の実がたくさんあるね」と、私がしまりすが採った木の実を見て言うと、「ほら、これは服よ。机とか家具とか。うどんとか」とM子。絵本に載っている絵とは関係ない想像のアイテムが載っているのである。「そうねえ。じゃあ、寒いから、あったかいこたつなんてどうかなあ」「プルルルル。がちゃ。

はい。～なんですが。こたつをお願いします。はい。～とセットの。いまなら９０点セット」「まあ、セットで。９０点も。うーん」「今じゃないとダメです」「あら、じゃあもらおうかな。それ下さい」と、私が言うと「はい、９０点セットのお願いします」とM子。

荒井健之助
『しぜん　しまりす』

付記：M子はカタログといって絵本を持ってくる。カタログの中の商品をその場で注文するとすぐに配達される、という流れを繰り返して遊ぶ。通販ごっこのようなものである。はじめの『おかあさんがおかあさんになった日』は絵本の中の絵から注文する商品を決めていたが、『しまりす』では想像の品を頼むようになる。食べ物がいっぱいのっているといって渡され、絵から想像できるものだろうと思っていたので、木の実をたのむ。しかし、M子の考えとは違ったようで「これは服よ」と言われる。シルバニアのしまりすの女の子と男の子から、こたつ、コート、家具、色んなものを注文した。「なにがいい？」「次、何にする？」と、聞いてくるのだが、M子のなかではある程度商品が決まっているらしい。「最近寒くなったねえ。寒いからこたつにしようかなあ」と、M子もごっこ遊びの会話の中で同意できるようなものはすんなりと、カタログから頼める。しかし、何もないところで「何がいい？」と聞かれ、想像で頼むとM子の考えとあわないことが多い。M子が“いいな”と思ったものとM子が「ここには～と～もあるけど」と提案したものを頼む形になる。M子と意見があったものだけが買われていく。

M子は電話での注文と商品を玄関にとりにいく役をずっとしている。電話の応答の仕方、玄関での対応の仕方をまねすることが楽しいのだと感じられる。再現することがおもしろいらしい。M子はどちらかというと、体を動かして遊ぶことより室内で遊ぶ方が多い。そのためふだんはあまり動かないのだが、今回は積極的に動いていて生き生きと遊んでいる。M子がごっこ遊びをするのは初めてである。

この記録は観察者とごっこ遊びをし始めた頃のM子の姿である。ごっこ遊びは、目に見えないイメージを相手と共有することが必要になる。M子は絵本という情報媒体を利用して、遊びを維持展開させている。M子にとって、絵本コーナーはそこに行けば多くの本があり、文字や情報の世界を楽しむこともでき、大人もいて、自分を受け止めてくれる空間であり、安定感の基盤のひとつになっていたように思われる。コーナーでの長期間の観察を通じて、M子の成長をとらえることもでき、彼女にとって絵本コーナーは成長のための重要な空間であったことも観察された。

（３）まとめ

Y幼稚園の絵本コーナーにおいて継続的な参加観察を行い、記録を作成した。計24回、148の記録を分析した結果、以下のことが明らかになった。①記録に登場する子どもは3歳児が非常に少なく、4歳児と5歳児が多く、両者はほぼ半々であった。幼児の行動範囲とこの空間へのなじみの程度に関連していると思われる。②記録に登場する絵本は113冊、のべ171冊で、ごく一部を除いて分散している。頻度順には、図鑑類が最も多く、次に「ねずみくんシリーズ」、「おかあさんがおかあさんになった日」「かいじゅうたちのいるとこ

ろ」などが続く。幼児が実際に手に取る絵本は、絵を読む楽しみがあり、わかりやすく、身近でおもしろいものという特徴がある。③絵本コーナーは適度な閉鎖性を持ち、くつろぎの空間構成になっているので、絵本を読むという本来の利用法の他に、ふれあいやごっこ遊びの場、気持ちが後退した時の庇護の空間としても使われていた。絵本コーナーは、園内の他の空間と同様に、単機能空間ではなく多機能空間となっていた。④絵本コーナーでは特定の子どもが常連となることがあり、その子どもにとっては重要な成長空間となっていた。

参加観察法による観察記録を資料に、絵本コーナーの使われ方について概略を見てきたが、今後も観察を継続し、幼児と絵本との出会い方や年齢ごとの特徴について分析していきたい。

終わりに、長期間の参加観察を快く受け入れ、ご協力下さいましたＹ幼稚園の先生方に心から感謝申し上げます。

引用文献

(1) 秋田喜代美　能智正博監修『事例から学ぶはじめての質的研究法　生涯発達編』東京図書　2007　ｐ.120
(2) 辻村明日香「幼稚園における絵本コーナーの保育的役割」度山口大学教育学部卒業論文 2005 年（未公刊）
(3)「2007 年版読書世論調査」毎日新聞社　2007 年
(4) 樽野博幸『こどものずかん⑥きょうりゅう』 ひかりのくに　1990 年
(5) なかえよしを作・上野紀子絵『ねずみくんのチョッキ』 ポプラ社　1974 年
(6) 長野ヒデ子さく『おかあさんがおかあさんになった日』 童心社　1993 年
(7) 今泉忠明指導、寺越慶司絵『しぜん　しまりす』 フレーベル館　1995 年